

1 当町における計画策定の目的

当町で管理する林道路線は平成29年3月末現在で全7路線、総延長は27.45kmとなっております。そのうち、林野庁が定める「インフラ長寿命化計画（行動計画）（平成26年8月林野庁策定）（以下、「インフラ長寿命化計画」という。）」に規定される林道における橋梁、トンネル及びその他重要な施設はそれぞれ1箇所となっており、平成28年度末までに具体的な行動計画を策定した後、個別施設計画を策定。その後、平成32年度にかけて、継続的に施設使用の安全を図る目的から、施設毎に点検、補修を行い、効率的にストック型の施設運用の推進を図って行くため、今回樹立したものです。

また、本管理行動計画は「林道施設長寿命化対策マニュアル（平成28年3月）林野庁整備課（以下、「林道施設長寿命化対策マニュアル」という。）」に示す方法等を基に構成されており、用語の定義、各種点検の項目、実施基準、対策・健全性の判定基準等については、同マニュアルによります。

2 当町に所在する計画対象とする農道・林道施設（適用範囲）

(1) 橋梁

種別	路線	施設区分	施設名	竣工年月	起点からの距離	延長	幅員	仕様
自動車道1級	豊幌線	橋梁	丹成橋	昭和55年10月	4.489km	20.0m	5.0m	鋼桁橋

(2) トンネル及びその他重要な施設

該当施設なし。

3 計画期間

平成29年度から平成32年度までとしますが、平成33年度以降は次期北海道橋梁長寿命化計画等に基づき、実施することとします。

4 対象施設の管理

当町においては、長寿命化対象施設の管理については、林野庁が定める「林道規程」等に基づき適切に管理してゆくこととします。

その他、日常的な維持管理の方法については、パトロールによる巡回（通常点検）と一定の頻度を定めて実施する定期点検（目視）を繰り返し、施設の異常の早期発見に努めるとともに、4月以降の融雪時から10月上旬ごろまでの期間にかけて年数回程度、以下に示す内容で通常点検を行うこととし、その点検結果を踏まえたうえ、今後の維持管理に係る対策を適宜検討するものとします。

・通常点検の内容（橋梁）

点検項目	確認方法
路面及びその他床版のクラック・穴・剥離	有無を確認のうえ、亀裂の幅・長さ、範囲を測定
橋座、橋脚部のクラック・剥離	有無を確認のうえ、亀裂の幅・長さ、範囲を測定。剥離箇所はおおよその剥離面積と最大最小の深さを測定。
排水柵の詰まり	路面の排水に支障がないか、土砂の詰まりがないかを確認
支承付近の土砂状況	支承付近の土砂堆積の状況を確認
伸縮装置の詰まり	伸縮装置内の土砂詰まりの状況を確認
高欄（ガードレール）のたわみ	外力、雪害による損傷の有無を確認
車両接触等による損傷	高欄塗装面の剥離箇所の有無を確認

※必要に応じて点検ミラー等による細部確認を行い、異常の有無を確認します。

※土砂の詰まりによる機能不全が発生している箇所がある場合には、応急的に該当箇所の清掃を実施します。

・通常点検の内容（トンネルその他重要な施設）

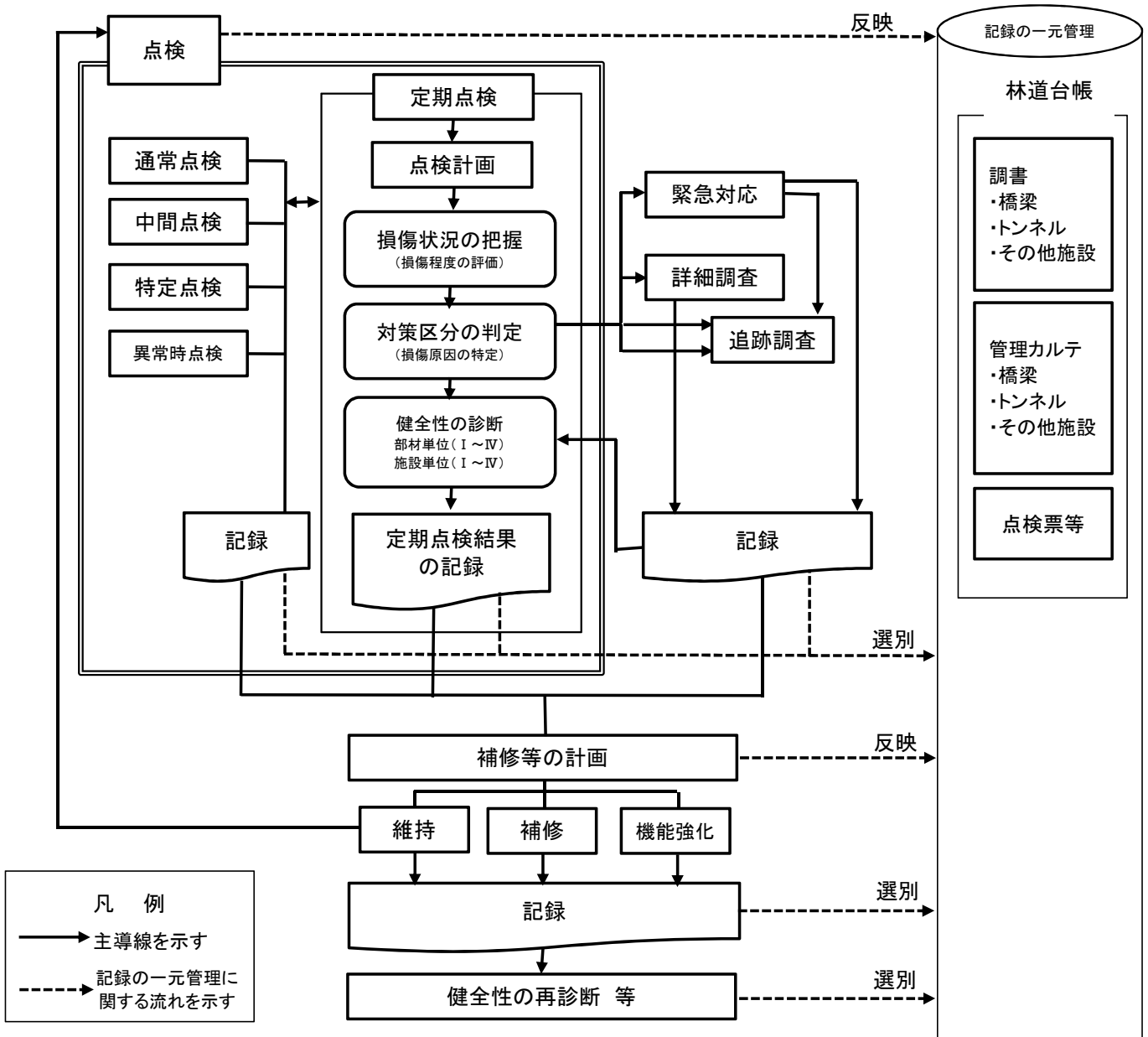
施設整備が行われる際に適宜策定することとします。

5 定期点検と健全性評価

定期点検は、安全で円滑な交通の確保、沿道や第三者への被害の防止を図るための維持管理等を効率的に行うなど林道施設の長寿命化を図る上で最も重要な点検であります。

また、定期点検では、損傷状況の把握、対策区分の判定等を行い、これらに基づき部材や施設全体の健全性の診断を行いこれらの結果を記録することとします。

標準的な流れは以下のフロー図によります。



- ※各点検の定義と点検従事者について
- 通常点検(点検従事者:本町土木・林政担当職員)
通常点検とは、損傷の早期発見を図るために林道の通常巡回(巡視)として実施するもので、通行車両等からの目視を主体とした点検をいう。
 - 定期点検(点検従事者:10定期点検の体制に挙げる者)
定期点検とは、対象施設の最新の状態を把握するとともに、次回の定期点検までの措置の必要性を判断するために必要な情報を得るために行うもので、一定の頻度を定めて定期的に実施する。点検は近接目視を基本としながら必要に応じて調査等を行い、もって、対象施設の健全性を診断しその結果を記録する。
 - 中間点検(点検従事者:10定期点検の体制に挙げる者)
中間点検とは、定期点検を補うために、定期点検の中間年に必要に応じて実施するもので、既設の点検設備や路上・路下からの目視を基本とした点検をいう。
 - 特定点検(点検従事者:10定期点検の体制に挙げる者)
特定点検とは、塩害等の特定の事象を対象に、予め頻度を定めて実施する点検をいう。
 - 異常時点検(点検従事者:本町土木・林政担当職員)
異常時点検とは、地震、台風、集中豪雨、豪雪等の災害や大きな事故が発生した場合、対象施設に予期していなかった異常が発見された場合などに行う点検をいう。

6 定期点検の区分

林道施設長寿命化対策マニュアルにならい、林道橋の定期点検では、橋梁の構造や補修経費等を踏まえつつ効率的に実施するものとし、次の区分によることとします。

- ・ 予防保全型点検（橋長15m以上の橋梁及び跨線橋や跨道橋など常に健全性を確保する必要がある橋梁を対象に行う点検）
- ・ 一般管理型点検（その他の橋梁を対象に行う点検）

7 定期点検の頻度

林道橋の定期点検は、林道施設長寿命化対策マニュアルに定めるとおり、以下に示す「橋梁の管理区分（点検区分）及び点検頻度等整理表」に従い、供用開始後2年以内に初回の点検を行うものとし、それ以降は、5年に1回のサイクルで行います。

なお、門扉等の設置が行われている林道は、対象施設の利用状況等を踏まえ10年に1回の頻度とします。

橋梁の管理区分（点検区分）及び点検頻度等整理表

管理区分 (規模重要度要件)	予防保全型橋梁 ※1		一般管理型橋梁 ※2	
		・ 橋長15m以上 ・ 跨線橋等要保全橋梁 （跨線橋、跨道橋など保全対策に影響がある橋梁や一般道の迂回路になるなど容易に架け替えが出来ない橋梁）		・ 予防保全型橋梁に該当しない橋梁
定期点検 (長寿命化点検サイクル)	新規設置 2年後		新規設置 2年後	
	開放型	5年に1回	開放型 ※3	5年に1回
	閉鎖型	10年に1回程度 (跨線橋等要保全橋梁及び50年以上経過した橋梁は5年に1回)	閉鎖型 ※4	10年に1回程度 (50年以上経過した橋梁は5年に1回)
点検区分	予防保全型点検 ※5		一般管理型点検	

※1 予防保全型点検対象橋梁を「予防保全型橋梁」として管理区分を設定。

※2 一般管理型点検対象橋梁を「一般管理型橋梁」として管理区分を設定。

※3 林業施業と併せて山村等の交通基盤として、一般利用する林道等。

※4 専ら森林施業用として門扉等により通行制限を設けて利用する林道等。

※5 新規設置橋梁など高い健全性が一定期間持続すると考えられる橋梁については、一般管理型点検も可とする。

8 定期点検の方法

定期点検は、近接目視により行いますが、経過の状況等に応じて触診や打音等の非破壊検査などを併用します。

9 定期点検の項目

定期点検では、対象橋梁毎に必要な情報が得られるよう、点検する部位、部材に応じて、適切な項目を選定して点検を実施します。

林道施設長寿命化対策マニュアルに示すとおり、損傷の種類に応じ、以下の方法に基づき、点検を実施することとします。

点検の標準的な方法

材料	番号	損傷の種類	点検の標準的な方法	必要に応じて採用することのできる方法の例
鋼	1	腐食	目視、ノギス、点検ハンマー	超音波板厚計による板厚計測
	2	亀裂	目視	磁粉探傷試験、超音波探傷試験、渦流探傷試験、浸透探傷試験
	3	ゆるみ・脱落	目視、点検ハンマー	ボルトヘッドマークの確認、打音検査、超音波探傷（F11T等）、軸力計を使用した調査
	4	破断	目視、点検ハンマー	打音検査（ボルト）
	5	防食機能の劣化	目視	写真撮影（画像解析による調査）、インピーダンス測定、膜厚測定、付着性試験
コンクリート	6	ひびわれ	目視、クラックゲージ	写真撮影（画像解析による調査）
	7	剥離・鉄筋露出	目視、点検ハンマー	写真撮影（画像解析による調査）、打音検査
	8	漏水・遊離石灰	目視	-
	9	抜け落ち	目視	-
	10	床版ひびわれ	目視、クラックゲージ	写真撮影（画像解析による調査）
	11	うき	目視、点検ハンマー	打音検査、赤外線調査
その他	12	遊間の異常	目視、コンベックス	-
	13	路面の凹凸	目視、コンベックス、ボール	-
	14	舗装の異常	目視、コンベックス又はクラックゲージ	-
	15	支承部の機能障害	目視	移動量測定
	16	その他		-
共通	17	定着部の異常	目視、点検ハンマー、クラックゲージ	打音検査、赤外線検査
	18	変色・劣化	目視	-
	19	漏水・滞水	目視	赤外線検査
	20	異常な音・振動	聴覚、目視	-
	21	異常なたわみ	目視	測量
	22	変形・欠損	目視、水系、コンベックス	-
	23	土砂詰まり	目視	-
	24	沈下・移動・傾斜	目視、水系、コンベックス	測量
	25	洗掘	目視、ボール	カラーイメージングソナー

注1：写真撮影は、カメラ、ビデオ等のデジタル撮影機器により行う。

注2：一般管理型点検は、上表のうち9、16、20、21を除く。

10 定期点検の体制

定期点検は、林道橋の定期点検を適正に行うために以下にあげる知識及び技能を有する者がこれを行うこととします。

・ 予防保全型点検

橋梁関係の技術的経験者または森林土木（林道）に係る調査・設計等の経験を有する技術者。

なお、25m以上の橋梁においては、以下のいずれかの橋梁に対する一定の専門性を有する技術者によることが望ましい。

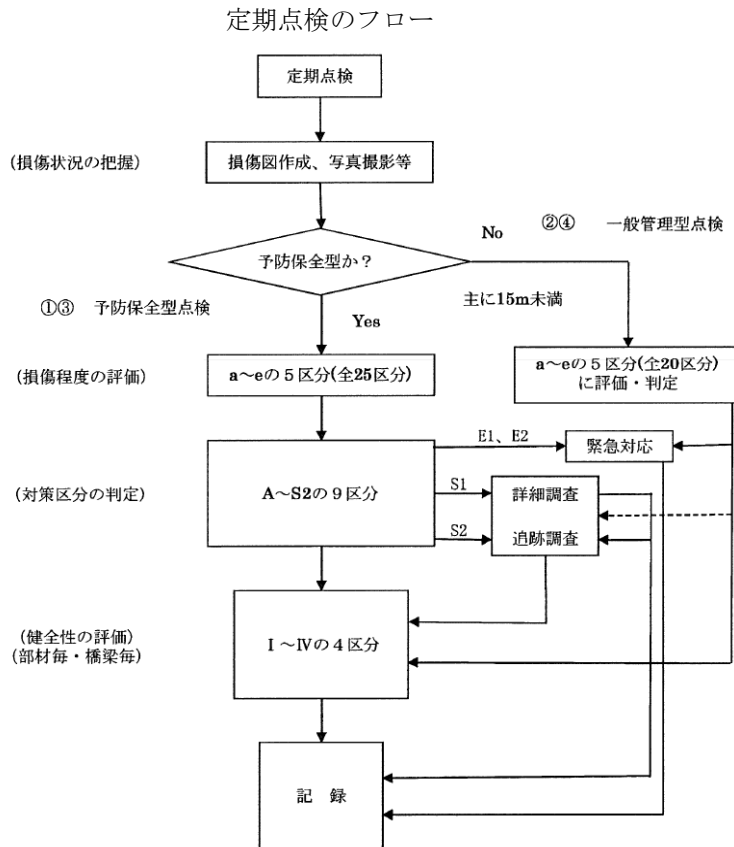
- (1) 橋梁に関する相応の資格又は実務経験を有すること
- (2) 橋梁の設計、施工、管理に関する専門知識を有すること
- (3) 橋梁の点検に関する技術と実務経験を有すること

・ 一般管理型点検

橋梁関係の技術的経験者又は森林土木（林道）に係る調査・設計等の経験を有する技術者。

1 1 定期点検の流れ

定期点検は、林道施設長寿命化対策マニュアルにならい、以下の定期点検のフローに従い実施することを基本とします。



定期点検は、路線区分を閉鎖型と開放型、管理区分を予防保全型橋梁と一般管理型橋梁に区分し、点検パターン①～④（定期点検のフロー）の流れに従って行うものとします。

定期点検のパターン

路線区分	開放型		閉鎖型	
	予防保全型橋梁	一般管理型橋梁	予防保全型橋梁	一般管理型橋梁
管理区分	①	②	③	④
点検パターン	新規設置後 2年		5年に1回	
点検間隔	5年に1回		10年に1回程度	
	供用後50年を経過した橋梁、跨線橋・跨道橋など		5年に1回	

1 2 定期点検の内容

定期点検では損傷の種類に応じて損傷区分を行います。損傷の種類、損傷程度の評価の方法等につきましては林道施設長寿命化対策マニュアルによるものとします。

1.3 対策区分の判定及び健全性の評価

定期点検では、橋梁の損傷状況を把握したうえで、構造上の部材区分あるいは部位毎、損傷種類毎の対策区分について、林道施設長寿命化対策マニュアルに基づき、評価・判定を実施します。

1.4 農道・林道橋毎の健全性の診断

林道橋単位の健全性の診断は、次の判定区分により行います。

健全性の判定区分

区 分		状 態
I	健 全	道路橋の機能に支障が生じていない状態。
II	予防保全段階	道路橋の機能に支障が生じていないが、予防保全の観点から措置を講ずることが望ましい状態。
III	早期措置段階	道路橋の機能に支障が生じる可能性があり、早期に措置を講ずべき状態。
IV	緊急措置段階	道路橋の機能に支障が生じている、又は生じる可能性が著しく高く、緊急に措置を講ずべき状態。

林道橋毎の健全性の診断は及び林道施設長寿命化対策マニュアルに基づき、部材単位で補修や機能強化の必要性等を評価する点検とは別に、林道橋毎で総合的な評価を付けるものであり、橋梁全体の状況を把握するなどの目的で行うものです。

部材単位の健全度が林道橋全体の健全度に及ぼす影響は、構造特性や架橋環境条件、当該林道橋の重要度等によって異なるため、健全性の診断の結果を踏まえて、林道橋毎で総合的に判断します。

また、「林道橋毎の健全性の診断」の単位は以下によることとします。

- (1) 林道橋種別毎に1橋単位とする。
- (2) 林道橋が1箇所において上下線等分離している場合は、分離している林道橋毎に1橋として取り扱う。
- (3) 行政境界に架設されている場合で、当該林道橋の管理者が単独の場合は当該林道橋の管理者が診断を行う。
- (4) 行政境界に架設されている場合で、当該林道橋の管理者が行政境界で各々異なる場合は、点検実施如何に拘わらず橋長の長い方の管理者が診断を行う。

1.5 修繕・更新

林道施設長寿命化マニュアルに基づいた健全性の評価の結果等に基づき、補修の計画を策定し、適宜必要と考えられる林道の効率的な維持及び修繕の方法について策定を行うものとします。

また、損傷が激しく、施設等の維持管理が困難な状況であると判定された場合には、施設の更新について早急に検討を行います。

1.6 定期点検結果の記録

定期点検の結果は、維持・補修等の計画を立案する上で参考とする基礎的な情報であり、各種点検票等に記録し蓄積します。

なお、定期点検後に、補修、機能強化等の措置を行った場合、その他の事故や災害等により林道橋の状態に変化があった場合には、「健全性の診断」を改めて行い、措置及びその後の結果を速やかに記録に反映することとします。